



TITLE:

食性との関連からみた霊長類の歯 牙形態の変異(VI 共同利用研究 2.研 究成果)

AUTHOR(S):

CITATION:

食性との関連からみた霊長類の歯牙形態の変異(VI 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1999, 29: 139-139

ISSUE DATE:

1999-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165180>

RIGHT:

手法によって解明するとともに、その脳内機構を研究することを目的として行われた。3年間の取り組みは行動レベルでの研究が2件、電気生理学的手法を主とする研究が1件、組織学的研究が1件、分子レベルの研究が2件、モデルの研究が1件と多様であった。3年間という短い期間にこれらの研究をインテグレートするところまでには至らなかったが、霊長類の視知覚の研究を多面的に展開できた点で有意義であった。この共同利用で取上げたテーマのひとつが核となり研究グループを形成し、科学研究費の獲得につながったこともプラスであった。

(平成7年度)

- ・サルを実験モデルとした高頻度パルス磁気刺激法の高次脳機能に及ぼす影響

(石口 明、和歌山医大)

- ・アカゲザル性差識別機構

(粟生修司、九州大・医)

- ・側頭極皮質の神経回路

(中村浩幸、九州大・医)

(平成8年度)

- ・霊長類大脳皮質の領野特異的分子の検索

(小池 智、基生研)

- ・ニホンザルにおける表情表出行動とその脳内機構

(菅生康子、東京大・医)

(平成9年度)

- ・視知覚および認知の脳内機構の処理とモデル化の研究

(石井直宏、名古屋工大)

- ・霊長類大脳皮質の領野特異的分子の検索

(小池 智、基生研)

- ・霊長類における視知覚および視覚認知の特性とその脳内機構の研究

(小松英彦、生理研)

食性との関連からみた霊長類の歯牙形態の変異

(実施年度：平成7～9年度)

(推進者：高井正成・國松 豊・茂原信生・内田亮子)

本計画研究では、霊長類の歯牙形態を比較解剖学的あるいは機能形態学的な立場から解析す

ることにより、霊長類各種の歯牙あるいは顎骨の形態とその種の持つ食性との関連を明らかにすることを目的として計画された。平成7年度は5件、平成8年度は2件の応募があり、平成9年度は応募者がなかったため成立しなかった。

本計画研究のまとめとしての研究会「霊長類の食性と歯牙・顎骨の形態」を平成10年2月6・7日に京都大学霊長類研究所宿泊棟第2会議室にておこない、約30名が出席した。

(平成7年度)

- ・人間による飼育がヤクシマザルの顎骨、歯列弓および歯の形態に与える影響

(阿部 操、日本大・松戸歯・矯正)

- ・食性からみたニホンザルにおける歯牙形態の地域変異について

(加藤久雄、東京大・理・生物科学・人類)

- ・ニホンザル顎関節の形態計測学的研究

(松香芳三・飯島輝明・鈴木康司・窪木拓男・矢谷博文・山下 敦・上月生也・鈴木秀典、岡山大・歯・第1補綴)

- ・第4乳臼歯の“顔”

(名取真人、岡山理大・理・基礎理、近藤信太郎、昭和太・歯・第1口腔解剖)

- ・下顎骨のバイオメカニクス

(山下真幸、獨協医大・第1解剖)

(平成8年度)

- ・食性からみたニホンザルの歯牙形態

(加藤久雄、東京大・理・生物科学・人類)

- ・食性との関連からみた霊長類の歯牙形態の変異

(清水大輔、京大・理・動物)

(平成9年度)

- ・応募者なし

生体分子の構造解析による霊長類の系統・進化

(実施年度：平成7～9年度)

(推進者：竹中 修・景山 節・庄武孝義)

本計画研究は核やミトコンドリアDNAの微小変化やダイナミックな変化、あるいは微量タンパク質の高感度分析やcDNA分析等により生体分子の構造変化を分子生物学、遺伝学的に研究し、霊長類の系統進化を明らかにすることを目的とし